〈僕〉のテクスト戦略

――森鷗外『雁』を読む――

小仲信孝

1

『雁』の結末は戦略性に富んだ結末といえよう。なぜなら、テクストを読み終えて閉じようとするとき読者の中に、どこが終わりなのか、という問いを喚起すべく巧妙に仕組まれているからである。たしかに、ひとつの物語は完結することになるだろう。岡田を主役とする〈岡田とお玉の物語〉のことである。「美しく睜つた目の底」に「無限の残惜しさ」を宿したお玉を残して岡田が留学の旅路についたことが記された時点で、二人の物語は過去の時間の中へと閉じられていく。完結した出来事として三十五年前の時間の枠の中に収められるのである。「一本の釘から大事件が生ずるやうに、青魚の煮肴が上条の夕食の饌に上つたために、岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにしまつた。そればかりでは無い。しかしそれより以上の事は雁といふ物語の範囲外にある」。語り手の〈僕〉は素っ気ない態度で〈岡田とお玉の物語〉を封印してしまうのである。

しかし、結末に対する語り手の態度は、実はアンビヴァレントである。次の一節をさらに書き添えることで、もう一つの物語を始動させているからにほかならない。

僕は今此物語を書いてしまつて、指を折つて数へて見ると、もう其時から三十五年を経過してゐる。物語の一半は、親しく岡田に交つてゐて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、図らずもお玉と相識になつて聞いたのである。譬へば実体鏡の下にある左右二枚の図を、一の影像として視るやうに、前に見た事と後に聞いた事とを、照らし合せて作つたのが此物語である。読者は僕に問ふかも知れない。「お玉とはどうして相識になつて、どんな場合にそれを聞いたか」と問ふかも知れない。しかしこれに対する答も、前に云つた通り、物語の範囲外にある。只僕にお玉の情人になる要約は備はつてゐぬことは論を須たぬから、読者は無用の臆測をせぬが好い。

この語り手の言説は誘惑に満ちている。読み終えようとする読者

をもう一度テクストに回帰させずには置かない。語り手は後日譚があるという。しかもそれは、これまでまったくテクスト内に開示されてこなかった〈僕〉とお玉をめぐる物語なのである。当然、読者の興味は喚起されることになるだろう。岡田が去った後、〈僕〉とお玉の間に何があったのか。言い換えれば「相識」という言葉の内実はどの程度のものであったのか。そして、ふたりのその後は……。読者の興味は、語り手の誘惑に導かれる形で膨らんでゆく。

だが一方で語り手は、それは『雁』という「物語の範囲外」であると宣言して、答えを隠蔽し、はぐらかし、読者の興味の拡大を無理やり封じ込めようとする。「無用の臆測をせぬが好い」と言いつつ暗に「臆測」を促し、だが「臆測」の手掛かりとなる具体的な材料は封印してしまうのである。結末における語り手は思わせぶりそのものといっていい。

竹盛天雄はこうした思わせぶりな叙述が「読者の心理に拘泥の意識を残す」(1)と指摘しているが、語り手によってその存在が示唆された〈僕〉とお玉の物語に「拘泥の意識」を持つことは、『雁』というテクストを解読するにあたって無意味ではないはずである。というよりもむしろ、解読の重要な手掛かりとなるのではあるまいか。

「物語の一半は、親しく岡田に交つてゐて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、図らずもお玉と相識になつて聞いたのである」と語り手は告白している。その通りであるとすれば、『雁』という物語が成立するためには「岡田が去つた後」がむしろ重要だということになる。〈僕〉は岡田不在の状況でお玉と知り合い、さまざまな情報を入手したらしいが、その情報は膨大な量に及ぶ。「肆」から「拾伍」までの内容は、お玉から聞いたであろう情報に基づいているが、章の数でいえば全体のちょうど半分を構成する分量に当たるのだ。しかも、その情報は、お玉の素性、父親との関係、末造の妾となったいきさつ、末造の素性とその家庭生活など、いずれをとっても詳細で質の高いものばかりである。こうした情報を〈僕〉はなぜ入手できたのか。それは、読者なら誰でも「拘泥」したくなる、『雁』という物語の成立そのものに関わる事柄なのである。「物語の範囲外」のことではありえない。その意味で、『雁』の読者は結末に至って新たに〈僕〉とお玉の物語を読み解くことを強要されているといっていい。にもかかわらず、「物語の範囲外」へと追放した〈僕〉の真の狙いはどこにあるのか。

もうひとつ忘れてならないことがある。〈僕〉のお玉への意識が中立(ニュートラル)ではなかったことだ。岡田とお玉の未成の恋に立ち会いながら、いつしか〈僕〉はお玉に魅了されていた。

家の前にはお玉が立つてゐた。お玉は窶れてゐても美しい女であつた。しかし若い健康な美人の常として、粧映もした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう変わつてゐるか、わからなかつたが、兎に角いつもと丸で違つた美しさであつた。女の顔が照り赫いてゐるやうなので、僕は一種の羞明さを感じた。

〈僕〉の思いは、岡田がまだ日本にいるこの時点では、もちろん

秘められたものにすぎなかったはずである。だが、岡田が旅立った後までも秘められたものでありつづけたであろうか。自制は解き放たれたと想像することも充分に可能だろう。いずれにしても、ひそかに〈僕〉がお玉の美しさの虜になっていた事実には注意すべきである。お玉と知り合うようになった経緯、そしてどのような形で膨大な情報を得たのかという問題と、〈僕〉の隠された欲望のゆくえは深く関わっているはずだからである。

このような興味深い問題を包含した物語、それが〈僕〉とお玉の物語だといえよう。が問題は、どのような物語を想定するにせよ、「臆測」の域を出ないということであって、語り手の隠蔽工作によって確固たる手掛かりがテクスト内からは得られないのである。だが、そうであろうか。語り手が読者をはぐらかし、惑わすようなポーズを取りながら、しかし確実に〈僕〉とお玉の物語を読み取るべく誘惑したのは、充分なる自信があってのことではなかったか。すなわち誘惑は、語り手であり『雁』というテクストの書き手でもある〈僕〉の、読者が「臆測」に必要な情報はテクストに書き込んであるとの自負の現れではなかったろうか。だとすれば、われわれ読者に求められているのは、〈僕〉の仕掛けた誘惑の戦略に嵌まってみることであり、提供された範囲の情報から〈僕〉の深層のメッセージを読み取ることなのである。

2

岡田とお玉の恋があらかじめ失われた恋だったことは、すでに指摘されている。開化のエリートである岡田――近代国家建設のための選良として立身出世コースを歩みつつある岡田と、そうした近代化の動静とはほとんど無縁に、開化の世に置き去りにされたように生きてきたお玉とは、田中実がいうように「同じ明治十三年を生きながら、全く異質な時空を生きていた」(2)。住む世界を異にする二人の生の軌跡は、はじめから出会うはずもなく定められていたのである。二人の恋の不可能性の理由はしかし、そればかりではあるまい。お玉の変貌もそのひとつとして指摘しておきたい。

岡田の女性観は至って明瞭である。その理想とするところは『虞初新誌』の「小青伝」に示されたような、いわば定められた運命を甘受する女性なのである。

あの伝に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闕の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を凝すとでも云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。

ここから分かるように、岡田にとっての女性は美しい愛玩物、つ

まり観賞の対象とのみ捉えているが、では、お玉は岡田の理想とする女性の条件に合致していたのであろうか。末造に囲われる以前のお玉はそうであったかもしれない。過去に「こはい顔のおまはりさん」に騙されるという痛手を経験しているお玉は、今また、望まぬ縁につながれて末造の妾にさせられる。だが、それをも「親の貧苦を救ふため」と「捨身の決心」で黙って受け容れる「おとなしい女」である。お玉はこれまで、与えられた人生に争うという経験をしたことがない。最終的には「どんな境遇にも安んじて」、自己の内部で消化してきている。しかも、「飴細工」を生業とする父親との貧しい生活の中で、「どんな忙しい暮らしをしてゐても、本能のやうに、肌を垢の附やうな事はしてゐなかつた」。その意味で、岡田の想い描く理想の女性に近似する存在であったともいえる。

だが、末造との新しい暮らしの中で、明らかにお玉は変わった。運命を甘受し、ひたすら耐えるだけの人間ではなくなった。他者からまなざされるだけの存在から他者をまなざす存在へと変貌していたのだ。

お玉が末造の妾となった現在までを振り返ってみよう。お玉という女は間違いなく、ある時点までは見られる女であったことが確認できる。そもそも二人の因縁は、まだ末造が大学の「小使」をしていた当時、通勤の途中、練塀町の裏路地に住んでいた「十六七の可哀らしい」お玉を見初めたことに端を発している。その頃のお玉が「貧しさうな家には似ず、此娘がいつも身綺麗にしてゐて、着物も小ざつぱりとした物を着てゐた」ことが末造の目にとまったのである。「松源の目見え」においても、お玉は末造のまなざしを一方的に浴び続けていた。

ふつくりした円顔の、可哀らしい子だと思つてゐたに、いつの間にか細面になつて、体も前よりはすらりとしてゐる。さつぱりとした銀杏返しに結つて、こんな場合に人のする厚化粧なんぞはせず、殆ど素顔と云つても好い。それが想像してゐたとは全く趣が変つてゐて、しかも一層美しい。末造はその姿を目に吸ひ込むやうに見て、心の内に非常な満足を覚えた。

「こはい顔のおまはりさん」に騙された不幸な一時期があったのも、そうした美しさに目を付けられたのが原因であった。いや、お玉の美しさに囚われていたのは世間の男たちばかりではなかった。父親も例外ではないのだ。末造の妾となってから初めてお玉が訪ねて来たとき、それまで散々娘の暮らしぶりを案じ、気を揉んでいたはずの父親の目を真先に捉えたのは、お玉の美しさである。「まあ、なんと云ふ美しい子だらう」——思わず父の口から漏れたことばである。お玉の前では父親でさえも見る人にさせられてしまうのである。そしてこの感嘆とともに、父親のわだかまりは解消してしまう。「親が子を見ても、老人が若いものを見ても、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて、老人だつて屈せずにはゐられない」。お玉という女のアイデンティティは男たちのまなざしが支えていたといっても過言ではない。

末造とお玉の関係性が反転するのは、末造の正体が高利貸しであることが判明したことがきっかけである。これを機に、お玉は対象化のまなざしをひそかに育てはじめる。対象化のまなざしはお玉自身へ、そして末造にも向けられていくことになるのだが、その結果として第一に確認しておかなければいけないのは、お玉が自分の美的価値に気づいたことであろう。「なんの躾をも受けてゐない芸なしの自分ではあるが、その自分が末造の持物になつて果てるのは惜しいやうに思う」とは、見られる存在として社会的に流通しうるとの自覚を持っていたことを証明していよう。注目すべきなのは、この自覚と前後してお玉が「毎日見るともなしに、窓の外を通る学生を見てゐる」ようになった事実である。お玉が見ていた対象が男一般ではなく「学生」であったのは何を意味するのか。そこには明らかに差別化の意識が潜在する。いうまでもなく高利貸しという職業と「学生」という身分を差別化する意識が、である。裏を返せば、末造に囲われる身であったお玉は、自分の美的価値が正当に評価されていないとの認識を持ちはじめていたことになろう。そういう思いがお玉の意識を外の世界へ向かわせていたのではなかろうか。お玉は男の愛玩物＝観賞され愛でられるだけの自分に飽き足らず、他者をまなざすことに目覚めつつあったのだといえよう。いずれにせよ、これまでほとんど見られなかったお玉の自己表出がはじまっていたことは重要だ。たしかにお玉は「独立」の第一歩を踏み出していた。

が、「独立」という意味でより重要なのは、いうまでもなく、末造に対して厳しい対象化＝選別のまなざしが向けられていた事実であろう。

末造が来てゐても、箱火鉢を中に置いて、向き合つて話をしてゐる間に、これが岡田さんだつたらと思ふ。最初はさう思ふ度に、自分の横着を責めてゐたが、次第に平気で岡田の事ばかり思ひつつも、話の調子を合せてゐるやうになつた。それから末造の自由になつてゐて、目を瞑つて岡田の事を思ふやうになつた。折々は夢の中で岡田と一しよになる。そして「ああ、嬉しい」と思ふとたんに、相手が岡田でなくて末造になつてゐる。

もちろん末造は、お玉の内部で起こっている事態を知らない。岡田の出現によって美しさを増してきたお玉の変化を「情愛が分かつて来た」結果と誤読していた末造は、お玉のすべては手の内に入っていると思っていたはずである。しかし、実はこのとき末造はかなり深刻な事態に見舞われていたといわねばならない。お玉は一方的に見られる客体ではなくなっている。所有物として対象化しようとする末造の一方的な視線がはね返されていたからである。庶民レベルの成功者にすぎない高利貸しの末造と時代の表舞台を歩くエリートの岡田、この二人の男を比較の俎上に乗せて計量してみせたお玉。その価値判断は驚くほど残酷かつ鮮やかなものだった。末造が知ったならば、おそらくアイデンティティの解体を誘発しかねないような、一種の死刑宣告でさえあるのだ。

お玉は最早、末造が想定する女の観念の中に生きてはいない。彼女は末造をも選び返す独自の基準を内包する女に変身していたのである。末造にとって他者としてのお玉の出現にほかならない。小森陽一によれば、他者性とは「常識的で一般的な枠組では了解することができない心の動き、発想で対峙してくることで発生する」(3)という。表面上は従順を装いながら、内心では末造という男の価値を冷徹に測りうる存在と化していたお玉はこのとき、末造の了解の枠組を逸脱した他者として立ち現れていたといえる。末造にとってお玉という女の自明性は消失していたのである。

3

岡田に蛇退治をしてもらった日のことである。お玉は岡田への思いの「急劇」な変化をこう述べている。「岡田はお玉のためには、これまで只欲しい物であつたが、今や忽ち変じて買ひたい物になつたのである」。憧れの対象を「買ふ」という発想は、金銭の力で自分を占有している末造の価値観をいつの間にかお玉自身が内面化したものであったろう。あるいは関谷由美子が指摘しているように、自分の美しさに対して「高い代価」が支払われている妾体験を通して、人間の情愛まで金銭と交換が可能と考えるようになっていたお玉の、「人間観の歪み」(4)をここに読み取ることも可能かもしれない。

だが、いま大切なのは、お玉の価値観が歪んでいるか否かを詮議することではない。お玉という女がひとりの男を「買ひたい」と思う、多分に男性的な価値観を内包した存在であったことであり、そうした女性性が岡田の観念の中の女性性と合致していたかどうかにほかならない。

岡田の理想とする女らしさについてはすでに確認した。「美しい物、愛すべき物」でありさえすればいいという理想像と、美しさを武器に男に対して選別のまなざしを向けるお玉の実際が大きくかけ離れていたことはいうまでもあるまい。岡田にとってもまた、お玉は他者性を帯びた存在であった可能性が高いのだ。

「とう〳〵往来を通る学生を見てゐて、あの中に若し頼もしい人がゐて、自分を今の境界から救つてくれるやうにはなるまいかとまで考へた」――お玉が岡田に期待すること、それはこれ以外にはない。と同時にこれは、お玉が男を選ぶ基準でもあるということだ。妾という境遇から脱出させてくれる器であるかどうか。この一点で岡田はお玉から価値判断を下されることになるのである。

岡田という男の特性は秩序正しさにあるといえるだろう。

僕は当時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。学期毎に試験の点数を争つて、特待生を狙ふ勉強家ではない。遣る丈の事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。日曜日には舟を漕

ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠つて匡されるのである。周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信頼すべき男だと云ふ感じが強くなる。

日課となっている散歩の「道筋」までほとんど決まっている岡田の生活ぶりを、竹盛天雄は「男性的論理的秩序を書生として体現し」[5]たものであるという。また千葉俊二によれば、「標準的下宿人」と評される模範生の岡田は「理知によって統御された安定的な秩序世界のロゴス的存在」[6]である。岡田という男はその秩序性、安定性に高い評価が与えられているといえるだろう。が、こうした評価はある単一的な指標によって成立していることに注意する必要がある。一言にいえば、男同士が認定し合うホモソーシャルな評価軸によるものだということである。岡田が身を置くのは「何をおいても近代日本の学術や知識の修得を目的とする知的エリート」[7]の世界である。男同士の競争原理に支配され、立身出世を絶対是とするそこでは、岡田はたしかに模範生であろう。規律正しさと弛まぬ努力、すなわち秩序と安定の有無が成否を分けるからである。

しかし、そこに異質な評価軸を持ち込んだらどうなるであろう。たとえば、非エリートの価値体系の中でも岡田は模範生でありつづけることが可能か。というより、いま問うべきはより具体的な問題である。お玉の眼に岡田はどう映るのか、である。お玉というひとりの女によってヘテロ・セクシャルな指標を加えられたとき、はたしてその評価は……。勿論、お玉にとっても知的エリートであることには変わりはないはずだ。だが、お玉はエリートの道を歩みつづけることだけを望んでいるわけではない。お玉が望んでいるのは手を差しのべて妾の境遇から救い出してくれること、つまり、場合によっては非エリートの道へ逸れるのを厭わないことである。岡田にとってそれは、これまで守り通してきた人生の「道筋」を逸脱することであり、規範としての秩序と安定を自ら破ることを意味していただろう。それが岡田に可能か。答えは明らかであろう。岡田は逸脱できない人間なのだ。岡田の理想とする女性像をもう一度想い起こそう。「女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬ」――ここには岡田の限界が端的に示されていよう。岡田は女を固定的な観念枠でしか捉えようとしない。言い換えれば、つねに「美しさ、愛らしさ」という鋳型に嵌め込もうとするのだ。が、いうまでもなく岡田の求める「美しさ、愛らしさ」とは、彼自身の、ないしは男たちの観念の中で創られた女らしさにほかなるまい。したがって、男が一方的に与えた枠組である「美しさ、愛らしさ」という表層において出会うことはできても、女の実

体としての生身の身体＝他者としての女に出会うことは不可能に近かったのである。

逆にいえば、岡田が依拠する知的エリートたちのロゴス的世界が見掛けほど盤石ではなかったのかもしれない。自分のテリトリーにおいてはあれほど順応性を発揮する岡田が、女という外の世界に対してあくまで頑なであったのも、岡田たちが形成しているホモソーシャルな安定した世界が、異なる価値体系の介入によって解体する危険性を孕んでいたからではなかったか。女の美しさに憧れ、美にこだわりつづける岡田。にもかかわらず、お玉というまたとない美を眼の前にしながら、硬く身を閉ざしていた岡田。その姿勢からは、一握りの知的エリートによるホモソーシャルな場で了解されている男らしさを切り崩されまいとする、ある種の脅えの感覚さえも感じ取れるようである。

4

〈僕〉の女性観とはどのようなものであったろうか。たとえば、小泉浩一郎は次のように述べている。「『花月新誌』の愛読者であり、古本屋の『金瓶梅』を岡田と競い合って彼と相識となった「僕」は、恐らくその女性観において岡田と軌を一にしたであろう」(8)。女という存在の受けとめ方、関わり方においてふたりに差異はないとの判断である。知的エリートである医学生という共通項をもつふたりは、たしかに女に対する認識においても類似の傾向をもっていたといえるだろう。お玉という女をどのようなコンテクストで語っていたかを確認してみればいい。岡田が蛇退治の顛末を語ったときふたりは、共有の読書体験である『金瓶梅』の潘金蓮にお玉を見立てている。つまり、一個の人間としてのお玉の実像にはほとんど無関心のまま、状況だけから『金瓶梅』の物語世界に準え、一方的な意味づけを行っていたことになる。榊敦子が指摘するように、「歴史的・社会的・文化的コンテキストを共有する」岡田と〈僕〉は「お玉という女性を自分たちのコンテキストで、自分たちに理解しうる言葉で説明しよう」(9)としていたといえるのだ。その意味では、岡田がそうであったように〈僕〉もまた愛玩物としての女を理想とし、他者としてのお玉には出会えない男であったはずである。

だが、そうだろうか。問題はそれほど単純ではないのだ。お玉への関わり方という点に関しては、ふたりのそれは実はまったく別物であったこと。『雁』は、そうしたふたりの明確な差異を顕在化しているテクストだと考えられるのである。

繰り返していうが、〈僕〉は医学生という知的エリートである。したがって岡田の場合と同様、本来〈僕〉とお玉の生の軌道が交わる可能性はないに等しい。いわばふたりの「歴史的・社会的・文化的コンテキスト」はあまりにかけ離れていたのである。しかし、交差するはずがない二つの軌道が交差したことをテクストは語っている。語り手の〈僕〉がお玉と「相識」になったと述べていることだ

けをいっているのではない。〈僕〉がお玉と「相識」になって以降、彼女からもたらされた膨大な量の情報を、書き手＝物語記述者としての〈僕〉が公開している事実をいっているのだ。お玉の来歴、末造の家庭の内実、妾としてのお玉の日常……公開された情報の大半は、〈僕〉が知的エリートの道を歩んでいれば知り得ないものばかりであり、また知的エリートの生活には不要のものばかりである。そのような情報をあえて公開する意図はどこにあったのだろうか。

岡田と〈僕〉を差異化することに隠れた意図があったと見るべきなのである。竹盛天雄は、お玉が岡田に対してどうしても「声が出なかつた」ことは、ふたりの間の「共通の言語」の欠如状況を象徴しているという(10)。岡田の人間的特性は厳格な規範性にあった。その規則正しい生活ぶりは信頼に足る人材の証である反面、人間的豊かさや情緒の欠落を意味していよう。だからこそ、市井の女お玉が発するメッセージは岡田の内面にまで届くことはなかったのだ。というより、岡田には人間としての、他者としてのお玉という女を受けとめる適性が欠けていたというべきなのだろう。岡田とお玉の関係は最後まで本質的にすれ違っていたのである。

だが、〈僕〉との間は違っていたようだ。岡田との間には欠落していた「共通の言語」が存在していたと考えられるからである。お玉は〈僕〉に膨大かつ詳細な情報を提供しており、お玉は間違いなく〈僕〉に向けて「声」を発している。それを可能にしたのは、もちろん〈僕〉がお玉の所属する世界に流通することばに対してコミュニケーション回路を開いていったからであろう。おそらく岡田不在の状況で、〈僕〉のスタンスに劇的な変化が生じていたのである。『金瓶梅』の潘金蓮という、岡田と〈僕〉の間で認定し合っていた男同士の認識の枠組を捨て、他者性をもって現前するお玉を自身の眼で測り直したのではなかったか。それを可能にしたのはほかでもない、岡田とお玉の恋の成り行きを傍観者として注視してきた〈僕〉の中に、お玉への秘めたる欲望と岡田への激しい嫉妬が燻っていたからである。

僕の胸の中では種々の感情が戦つてゐた。此感情には自分を岡田の地位に置きたいと云ふことが根調をなしてゐる。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌つてゐる。僕は心の内で、「なに、己がそんな卑劣な男なものか」と叫んで、それを打ち消さうとしてゐる。そして此抑制が功を奏せぬのを、僕は憤つてゐる。自分を岡田の地位に置きたいと云ふのは、彼女の誘惑に身を任せたいと思ふのではない。只岡田のやうに、あんな美しい女に慕はれたら、さぞ愉快だらうと思ふに過ぎない。そんなら慕はれてどうするか、僕はそこに意志の自由を保留して置きたい。僕は岡田のやうに逃げはしない。僕は逢つて話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢つて話だけはする。そして彼女を妹の如くに愛する。彼女の力になつて遣る。彼女を淤泥の中から救抜する。

そればかりではない。〈僕〉がお玉やその周辺人物についてのき

わめて私的な情報を獲得していることから、お玉が〈僕〉に厚い信頼を寄せていた事実が推察できるのだ。それだけ〈僕〉がお玉の近いところにいて、深く関わっていたということでもある。ふたりの「歴史的・社会的・文化的コンテキスト」がある接点を見出していたといってもいい。いずれにせよ、〈僕〉は岡田が成し得なかったことを成し遂げていた。本来的には生活圏の全く異なる市井のコンテクストにも身を置ける人間、つまり知的エリートからの逸脱が可能な男であるということが、岡田にはない〈僕〉の特性だったのである。岡田と〈僕〉の人間的な差異……その事実をこそ読者が読み取ることを書き手の〈僕〉は要請しているといえよう。お玉の来歴や末造の家庭の様子を記述した部分については、視点の混乱の問題などが指摘されているが、重要なのは、公開された情報がこうした書き手の〈僕〉の戦略に基づいてテクスト内に位置づけられているということにほかならない。

以上のことから、〈僕〉とお玉のその後をおおよそ想定することが可能だろう。「僕にお玉の情人になる要約の備はつてゐぬことは論を須たぬ」という言説とは裏腹に、テクストは〈僕〉がお玉の「情人」にふさわしい男であることを強く示唆している。〈僕〉のお玉への性的関心の強さ、お玉が提供した情報の濃度と〈僕〉への信頼から見る限り、すくなくとも、岡田が去った後のふたりの関係には劇的な進展があったと判断するのが自然である。問題はしたがって、語り手が仄めかす〈兄と妹〉の関係を超えて、より親密な男女の関係になったであろうふたり(11)の、さらにその後なのである。ここにひとつの可能性として、〈僕〉とお玉の結婚という形の未来を呈示しておきたい(12)。なぜなら、これまでのお玉は一貫して制度外の女だったからである。巡査との偽の結婚生活、末造の妾――いずれの体験においてもお玉は「戸籍」に登録されることのない女だった。お玉が末造の妾となった明治十三年は、それまで公認されていた妾の存在が刑法の規定から除外された年でもあった（施行は十五年）。その意味でお玉という女は制度と縁の薄いマージナルな存在だといえよう。しかも、高利貸しの妾という理由で現実社会の中でも差別化の標的にされる二重にマージナルな存在だったのである。そうした状況を生きてきたお玉の願望は「今の境界から救つてくれるやうにはなるまいか」というものであった。お玉の「情人」を自負する〈僕〉の選択は……。

が、これ以上は「雁と云ふ物語の範囲外」に属するのかもしれない。〈僕〉こそお玉の「情人」となる有資格者であったことをもう一度確認して、「無用の憶測」を終えることにする。

注(1) 『鷗外　その紋様』（明治書院、昭59・7）

(2) 「〈虚構のなかのアイデンティティ〉――『雁』――」（「日本文学」昭61・10）

(3) 『漱石を読みなおす』（ちくま新書、平7・6）。女の他者性という問題について本書から多くの示唆を得ている。

(4) 「『雁』の叙法――〈疎遠〉な二つの物語」（「敍説」Ⅹⅲ、平8・8）

(5) 注1に同じ

(6) 「「窓の女」考」（「森鷗外研究」2、昭63・5、『エリスのえくぼ　森鷗外への試み』小沢書店、平9・3、所収）

(7) 注1に同じ

(8) 『森鷗外論　実証と批評』（明治書院、昭56・9）

(9) 『行為としての小説』（新曜社、平8・6）

(10) 注1に同じ

(11) 〈僕〉とお玉の男女の関係を読み取っているものに山崎一穎『二生を行く人　森鷗外』（新典社、平3・11）がある。ただし山崎は、〈僕〉にはふたりの関係を隠蔽する意図があったと指摘する。

(12) 田中実は前掲論文の中で「〈手記〉のなかで、「僕」はお玉の情人だった」と述べ、ふたりの関係をあくまで〈手記〉の中の出来事に限定しているが、本稿ではテクストの外でも現実化したと捉えている。